

経済と経営 30-2 (1999.9)

〈研究ノート〉

留学生に対するアカデミック・ライティング教育  
—— 1年間の指導内容と今後の課題 ——

佐藤 不二子  
二 通 信 子

1. はじめに
2. 入学時の学生の日本語の状況
3. アカデミック・ライティングの指導の経過
4. 最終レポートの評価
5. 問題点の考察
6. 今後の課題

1. はじめに

筆者らは、日本の大学で学ぶ留学生のために筆者らが開発した教材『留学生のためのレポートの文章』（以下『レポートの文章』）を使って、北海学園大学および札幌大学の新入学の留学生に対してアカデミック・ライティングの指導を行ってきた。本稿は98年度に行った授業での指導内容を報告し、学生の習得状況から今後の指導の課題を探るものである。この教科書の開発の意図、目標、ならびにその根拠等については、二通・佐藤（1999）に詳しく述べたので、そちらを参照されたい。

学生の習得状況を計る材料としては、この授業のまとめにあたる最終レポートの文章を選んだ。取り上げたレポートは、98年度入学の北海学園大学の2名と札幌大学の35名の合わせて37名の留学生のレポートである。

本稿では、第2章で入学時の学生の日本語の状況、第3章でアカデミック・ライティングの指導の経過、第4章で最終レポートの評価、第5章で問題点の考察、第6章で今後の課題を述べる。

なお、第2章、第3章については、学生の人数の多い札幌大学での状況及び指導例に基づいて述べる。

## 2. 入学時の学生の日本語の状況

### 2.1 日本語能力

今回最終レポートを提出した37名の留学生のうち、北海学園大学の学生2名は共に、日本語能力テスト1級の合格者であったが、札幌大学の学生は、1級の合格者および同程度と見做される高得点者は35名中9名のみであった。

このような1級合格者とそれに相当する者を能力の上位者として、下位者には、日常会話のうけこたえが困難な者もいた。日本語能力が低い学生は、自国で日本語の学習をし、入学で初めて来日したというケースが多かった。教室と教科書以外には日本語を見聞きせずに学習した人たちである。

また、日本での学習者の中で、日本語学校の推薦を受け、面接だけの審査で入学した学生の中には、日常的な会話はできても、「読み」「書き」の能力の低い者がいた。このように、学生間の日本語能力の開きは大きく、それらの学生たちを同じクラスで教育するのは適当ではないと思われたため、札幌大学では次節のような対策を取った。

## 2.2 能力差への対応

札幌大学では、能力別のクラスを編成した。まず、授業の初日に「文法」「読解」「聞き取り」の3項目についてプレースメント・テストを実施し、その結果と日本語能力テストの得点を参考にして、3段階5クラスに分けた。日本語能力のレベルとしては上・中・下の3段階に分けることができたが、教育的配慮から、上を2クラス（各9人）、中を1クラス（7人）、下を2クラス（各6人）と分けたのである。クラスにより人数を変えたのは、日本語レベルの低いクラスでは、できるだけ個別に対応した指導ができるように小人数が望ましいと考えたためである。

聞き取り及び発話力のついていない学生は、力のある学生のいる場面ではほとんど自発的に発言しない。また、授業の中で教師が全員に向けて指示したことが聞き取れない場合にもすぐ質問することはほとんどない。自分だけが聞き取れなかったと思い、質問をためらう。個々に呼び掛けて初めて反応するのである。また、他の学生の質問や、それに対する教師の答えも、聞きとれていないか又は聞いていないため、同じ授業時間内に同じ質問を異なる学生にされるということもよくある。このような学生には、なるべく同レベルの集団で不安や気後れを感じさせず、しかも個別の対応をする必要がある。

各クラスとも同じテキストを使用した。力のついていないクラスには次のような対処をした。まず、読みの部分では、学生にとって未知の文法・表現・語彙の説明に時間をかけた。次に、提出された課題作文は添削して戻すだけでなく、そこに現れた文法・表現などの共通の弱点は授業内で練習問題にして全員で考えさせ、個々の弱点はそれぞれに宿題として練習問題を与え、手当てをした。

### 3. アカデミック・ライティングの指導の経過

#### 3.1 『レポートの文章』による指導

##### 3.1.1 『レポートの文章』の全体的な指導内容

筆者らは先に、大学の学部段階の留学生に対するアカデミック・ライティングの指導内容を整理し（二通・佐藤 1999 pp. 77~80）、その指導のための教科書『留学生のためのレポートの文章』を作成した。そこで挙げた指導内容とは以下の五つである。

- ①アカデミック・ライティングに必要な基礎的な知識, 技術
- ②考えをまとめていく過程
- ③論理的な思考の組み立て方
- ④文章構造の意識化
- ⑤文章に対する評価・推敲能力の養成

『レポートの文章』は、入学1年目の留学生を対象に週1コマ、1年間でアカデミック・ライティングの基礎を指導することを目指している。この教科書のシラバスは表1の通りである。

表1 『留学生のためのレポートの文章』

第1部 文章表現演習の前に	第2部 大学生のための文章表現
第1課 レポートに使われる文体	第1課 説明(1) 仕組み・状態
第2課 文の基本	第2課 説明(2) 歴史的な経過
1.自動詞・他動詞の使い分け	第3課 分類
2.助詞の「は」と「が」の使い分け	第4課 定義
3.文のねじれ	第5課 要約
4.語や文の名詞化	第6課 比較・対照
第3課 句読点の打ち方	第7課 因果関係
第4課 各種の記号の使い方	第8課 図表の利用
第5課 引用のしかた	第9課 論述
第6課 段落の書き方	第10課 レポートの実例

筆者らはこの教科書を使い、前頁の五つの指導項目を次のように指導した。

①アカデミック・ライティングに必要な基礎的な知識，技術

教科書の第Ⅰ部にまとめて取り上げた。入学後の授業の8コマ程度を使い、アカデミック・ライティングに用いられる文体や表現，正確で明快な文の書き方，句読点や各種の記号，原稿用紙の使い方，引用の方法などを指導した。

②考えをまとめていく過程

教科書の第Ⅱ部の各課の作文課題，及び最終レポートで指導した。特に最終レポートでは，テーマの絞り込みやアウトライン作成の指導を試みた。これについては3.2で報告する。

③論理的な思考の組み立て方

第Ⅱ部の各課の内容に沿って，論文の主題や目的に応じた論理の組み立て方や論の展開の方法を指導した。その内容は次頁の表2の通りである。

④文章構造の意識化

第Ⅰ部で，段落内の構造や段落相互の関係を中心に指導した。また，第Ⅱ部の各課の本文では，常に段落内の構造や文章全体の構造に注目させ，課題作文では，予め段落構成についての指示を与え，段落の構造を意識させた。

⑤文章に対する評価・推敲能力の養成

第Ⅰ部終了時にそれまでの学習項目の一覧表を渡し，以後の作文の点検項目とさせた(資料2)。また各課の作文課題の際，その課の目標を記載した評価票を示し，目標を確認させた(資料1)。課題の返却の際には，その評価票に評価やコメントを記入し，到達度を明らかにした。このようにして，学生自身の文章評価能力や推敲能力の強化を図った。

表2 論理的な思考の組み立て方の指導内容

第1課 説明(1) 仕組み・状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕組みの説明に必要な事項を整理して優先順位をつける。</li> <li>・説明の効果的な順序を考える(概要から各部分の説明へ)。</li> <li>・必要な場合、表や図を書き内容を整理する。</li> </ul>
第2課 説明(2) 歴史的経過	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事柄の概要を記述するために、5W1Hの質問を想定し、その答えを書き出してみる。</li> <li>・出来事を時間の流れに従って眺め、重要事項を取り出す。</li> <li>・一連の流れから変化の特徴を掴み、区切りや纏まりを作る。</li> </ul>
第3課 分類	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的に合わせて分類の基準を定め、基準に従って分類する。</li> <li>・項目間の違いを明確にし、それぞれの特徴を記述する。</li> </ul>
第4課 定義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定義する語や事柄がどのような分類に入るか考える。</li> <li>・同じ範疇に入る他の語や事柄との細部の違いを考える。</li> <li>・事柄や現象の定義の場合、語義の説明後、具体例を示す。</li> </ul>
第5課 要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題から、その文章の主題を推測する。</li> <li>・各段落の中心文を探し、各段落の要点を把握する。</li> <li>・各段落の要点から全体の要旨を把握し、要約の文章を作る。</li> </ul>
第6課 比較・対照	<ul style="list-style-type: none"> <li>・比較するのに適した題材を選び、比較の視点を明確にする。</li> <li>・共通点と相違点をそれぞれ検討し、明らかにする。</li> <li>・相違点を生み出す背景についても考える。</li> </ul>
第7課 因果関係	<p>&lt;原因を考える場合&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・結果に関係があると考えられる事実をできるだけ挙げる。</li> <li>・集めた事実から瑣末な要因を排除し、有力要因に絞り込む。</li> <li>・有力要因間のつながりを論理の飛躍なく整理する。</li> </ul> <p>&lt;結果を考える場合&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事実や経験的知識から様々な結果を想定する。</li> <li>・導かれる結果の中から、論理に適い最も重要なものに絞る。</li> <li>・原因から結果に至る過程を論理の飛躍なくつなげる。</li> </ul>
第8課 図表の利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数値を使った具体的な表現の効果を理解する。</li> <li>・資料の価値を客観的に判断する。資料の出所を明示する。</li> </ul>
第9課 論述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主張や意見を明確に出し、その根拠を引用により裏付ける。</li> <li>・反対の立場の意見も取り上げ、それに対する反論を述べる。</li> </ul>

### 3.1.2 『レポートの文章』の各課の作文課題

課の内容に応じて、表3のように作文課題を出した。長さはどれも400字詰め原稿用紙1～1枚半程度で、短いものである。なお、表中の課の表示の1-1は第I部の第1課、2-1は第II部の第1課を示す。

表3 各課の作文課題

\*印は段落の構成を指示したものの

課	課 題	課題についての指示など
1-1 文体	自分のこと	である体、事実のみの記述
2-1 仕組み	自国の議会制度のしくみ	*構成【概要－各部分の記述】
2-2 経過	国際協力機構(例 IMF)	*構成【概要－経過－課題】
2-2 分類	「交通」の定義から	分類の文章の完成
2-4 定義	定義文(例 知的所有権)	*構成【語義－例－実情】
2-5 要約	野生動物のペット化	論の展開を考慮した要約文
2-6 比較	女性の就業率の国際比較	*構成【グラフの特徴－考察】
2-7 因果関係	フロンガスと皮膚ガン	因果関係の整理、説明
2-8 図表	穀物自給率の国際比較	グラフの特徴の説明

以上のような学習を経て、最終レポートの作成に取り組ませた。

## 3.2 最終レポートの指導

### 3.2.1 最終レポートの目的

このレポートの第一の目的は、『レポートの文章』により論理的な文章の書き方を学んできた学生に、授業で得た知識や技術を統合して一定の目的を持った文章を書かせることにある。

『レポートの文章』では、各課でそれぞれの学習項目に応じた課題作文を学生に書かせてきた。しかし、それらの課題作文では、各課の指導項目である「論の組み立て方法」が指定され、また、分量も600字程度に限定されている。話題も、課によっては自分で選べるが、大部分は定められている。したがって、学生自身が定めた目的で文章を書かせる機会はなかったのである。そこで、最終課題作文では、学生に話題を自由に選ばせ、学生の選んだ論法

で文章を書かせることにした。

第二の目的は、文章を書くための具体的な過程を体験させることにある。最終レポートの作成には次のような手順を踏むことが求められる。まず、テキストの読み物や関連資料を通じて培われた問題意識をもってレポートのテーマを選び、次に、それに関する文献や資料を見つけて読み、自分の考えや意見を形作っていく。中には、テーマを選ぶ段階で既に自分の意見があり、それを更に確認、補強するために文献や資料を選ぶ場合もあろう。いずれにしても、文章にするには、レポートの分量、準備期間、資料などを考慮に入れ、主題を絞っていかなければならない。そして、その主題をどのように展開するかを考えアウトラインを書く。アウトラインができたなら、それに従って、目的に合った文の型や表現を選んで書いていく。筆者らは、そのような過程を経て書くという態度を習得させたいと考えている。

以上が最終レポートの目的である。次節では最終レポートの指導の経過を述べる。

### 3.2.2 最終レポートの指導の経過

最終レポートについては、後期の初めに以下の日程と要領で指導を開始した。学生が選んだテーマや主題、または、設定したアウトラインを教師と共に検討し、必要なら修正していく過程を設けるため、提出までに3か月余の準備期間を設けた。なお、ここに記した日程はあるクラスの例である。

#### ● 9月24日：最終レポートの初回説明（ハンドアウト配布と口頭説明）

以下のようなハンドアウトを学生に渡した。但し、字数については、日本語力の低い学生のクラスでは1600字程度とした。



## ーハンドアウトの形式と内容ー

〈最終レポートについて〉

- ・ テーマ：自分で選んだもの
- ・ 字 数：2000 字
- ・ 提出日：冬休み後の最初の日本語の授業日（1月14日）

上記のレポートに関して、以下のような手順に従うこと。

1. 10月22日までに次のことを書いて提出する。
  - ① テーマ
  - ② その中で述べる主題
  - ③ 使用する資料
2. 11月26日までにレポートのアウトラインを書いて提出する。

## ー口頭説明の要旨ー

- ・ テーマは自由だが、文章は感想文や単なる要約文ではなく、ある事柄についての自分の主張・意見・考察などを主題として明確に打ち出し、論理的に述べたものであること。
- ・ 自分が興味を持てる話題を取り上げること。
- ・ 主題を支える客観的根拠を得るために、または自分と反対の立場の考えについても言及できるように参考文献・資料を必ず使用すること。
- ・ 直ちに準備に取りかかること。
- ・ 1, 2に示した期日は最終期限であるから、テーマ、主題、参考資料、あるいはアウトラインなどは決まり次第提出すること。その際、教師からの示唆を受けたら、納得するまで教師と話し合い最終決定をすること。

- 10月22日：テーマ、主題、参考文献の提出期限

提出期限以前に出されたものも含め、この日までにほぼ全員から提出された。しかし、提出されたものを見ると、テーマだけは決まっても主題が明確に定まっていなかったものが多かった。一例を挙げると、テーマが「環境ホルモン」、主題が「環境ホルモンの害について」というようなものである。

このため、授業の中で全員を対象に、テーマからの主題の絞り込みかたについていくつかの実例を示した。さらに主題に問題のある個々の学生には、提出物の返却の際に主題の絞り込みのための示唆をつけた。例えば上述の「環境ホルモンについて」の例であれば、学生はその研究者ではないから、環境ホルモンの原因物質やその害については、専門書の記述を引用・要約などするしかできない。そこには自分の見解を入れる余地はない。そこで、この問題を実際の自分の生活と結び付け、どの部分でこの原因物質とされるものに関わっているか、害を防ぐためにどんなことができるかを考え、その考察を主題にしてはどうかという示唆をした。また、参考文献がわからないというものには、教師の手持ちの図書を貸し出す、図書館での資料の探し方を教える、などの対処をした。

テーマ、主題について何らかの改善を必要としたものには再提出を求めた。このような指導に対しての学生の反応は次の3種類に分けられる。

- ①指示を理解し、適切な改善を行って再提出したもの、
- ②主題を絞るまでに再三教師と相談し、再提出したもの、
- ③何も反応しなかったもの、つまり再提出しなかったものである。

最後のグループ、つまり再提出しなかったものというのは、結果としてそうなったということである。この間もテキストに沿っての授業を行っていたため、各課の課題作文の提出は厳しくチェックしたが、最終レポートについては、自発的提出を待つうちにそのような結果になった。

#### ● 11月26日：アウトラインの提出の期限

提出期限以前にアウトラインを提出した者はごく少数で、最終的に提出

した者は全体の50%であった。

提出日に至るまでのアウトラインの書き方の指導については、授業の中で次のように行ってきた。テキストの読解部分の文章や実際の論文を例にして、序論・本論・結論の構造や内容の展開を取り出し、図示して、説明した。そして、これもまた論文の実例を示しながら、文章の主題は、まず序論で明確に示し、結論で再び触れ、まとめるように指導した。しかし、学生に、実際にアウトラインを作らせて文章を書かせる練習はして来なかった。学生にとってはこの最終レポートのアウトライン作成が初めての経験であった。

提出されたアウトラインの大部分は、序論・本論・結論に分かれ項目も挙げられ、形の上では整っていた。そのため、特に修正の指示を与えたものはなかった。だが、後に提出されたレポートを見てわかったことであるが、事前に提出したアウトラインに沿って書かれていないものがかかりあった。

#### ● 12月17日：最終レポートの評価票（資料3）の配布と提出期限の確認

冬期休暇直前のこの日、最終レポートの評価票を配布し、そこに記載された各項目の内容を確認させ、レポート作成にあたってはこれをもとにして文章を必ず自己点検をするように言った。また、レポートの提出期限の再確認をした。

以上が最終レポートの指導の経過である。

## 4 最終レポートの評価

### 4.1 最終レポートの評価項目

今回提出されたレポートは合計37であった。評価にあたっては、以下のよ

うに1) から7) までの評価項目を設定し、それぞれの項目について、得点の高い方から順に4～1の4段階で評価した。

- ①問題意識を持ち、かつ筆者自身の考察を述べているか。
- ②文章の目的をレポートの始めに明確に述べているか。
- ③全体が序論・本論・結論で構成され、内容に一貫性があるか。
- ④論述が論理的に行われているか。
- ⑤段落ごとのまとまりがあり、段落相互の関係も適切であるか。
- ⑥正確な日本語で書かれており、文の意味も明快であるか。
- ⑦文献からの引用及び参考文献の記載が適切に行われているか。

#### 4.2 最終レポートの評価結果

全員のレポートについて、上の評価項目により採点を行い、評価の結果から全体を下の5つのグループに分類した。以下に、グループごとの到達点や問題点を見ていきたい。

- A. 評定の平均値が4に近く、全体的に目標に達している。……8人
- B. 評定の平均値が2～3で、項目間にもバラツキがある。……7人
- C. 主要部分が他の書物からの借用。評定の判断が難しい。……8人
- D. ほぼ全体が他の書物からの借用。本人の文章と認め難い。…10人
- E. 自分の体験や主観的な感想で、課題の目的に合わない。……4人

##### 【Aグループ（8人）】

まず、このグループのレポートのアウトラインの例を示す。なお、アウトラインの枠の右側に、各レポートの構成についての説明を添えた。

レポート例①「日本の挨拶とモンゴル族の挨拶の比較」

- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに－「挨拶」の語義, 本稿の目的</li> <li>2. 日本の挨拶とモンゴル族の挨拶の共通点</li> <li>3. 日本の挨拶とモンゴル族の挨拶の相違点</li> <li>4. 挨拶の必要性</li> <li>5. おわりに</li> </ol> |  |
|--|--|

語義, 主題提示  
比較 (共通点)  
比較 (相違点)  
意見

レポート例②「マスコミの影響について」

- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 序論－マスコミとは</li> <li>2. 本論             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) マスコミのいい影響</li> <li>2) マスコミの悪い影響</li> </ol> </li> <li>3. 結論             <p style="margin-left: 2em;">マスコミをどのように利用したらよいか</p> </li> </ol> |  |
|---|--|

定義, 主題提示  
検証 (現状と考察)  
  
  
意見

レポート例③「エルニーニョ現象と世界の影響」

- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. エルニーニョとは何か</li> <li>3. エルニーニョによる打撃</li> <li>4. エルニーニョの影響力を少なくする対策</li> <li>5. おわりに</li> </ol> |  |
|--|--|

主題提示  
定義, 詳しい説明  
現状の報告  
  
意見

## レポート例④「クローン羊は産まれてはいけないものか」

はじめに	主題提示
1. クローンとは何か	定義
2. クローン動物はいかに創られるのか	説明
3. クローン人間は創られるのか	
4. クローン人間は本物と同じなのか	検討
5. クローン人間の誕生で生じる問題点	
6. クローン人間誕生によって得られるメリット	意見
結び	

以下にAグループのレポートの特徴と問題点を挙げる。

- ・ 主題に対する問題意識を持ち、レポート作成に取り組んでいる。自分の意見を検証する、主題についての知識を得るなど、レポート作成の目的が明確である。
- ・ アウトライン例に見るように、序論・本論・結論の構成ができており、内容も首尾一貫している。全員が章立てを行うとともに、章題を付けて全体の構成を把握しやすいようにしている。また、以下の序論の例のように、8人中7人がレポートの目的を序論部分で明示している(下線部参照)。ただし、章の分け方や長さについては、改善が必要なものもある。

## レポート例③「エルニーニョ現象と世界の影響」の序論

最近どんな国であっても、気象循環は変わりつつある。いろいろな説があるにもかかわらず、今日一番注目されているのはエルニーニョ現象である。このレポートでは、エルニーニョ現象とは具体的に何かということと、世界に与える影響について取り上げたいと思う。そして、その影響を少なくするために、各国の政府でどんな対策がたてら

れているかについても考えたいと思う。

#### レポート例④「クローン羊は産まれてはいけないものか」の序論

1997年2月に、「クローン羊・ドリー」誕生のニュースがイギリスから世界に流れたとき、科学者たちだけではなく、世界中の人が驚き、大きな反響が起きた。その時、世界の世論は科学の凄さより、人間のクローンが産まれるのを恐ろしがっていた。そこで、私はクローン人間が産まれてもいいのではないかと思い、これからクローンの技術やクローン人間のメリット等、いろいろな面で考えてみたいと思う。

- ・論の展開に大きな飛躍がなく、根拠を伴った論述を行おうとしている。そのために、具体的な事例やデータを挙げるとともに、他の文献からの引用を行っている。ただし、根拠が不十分なものもある。
- ・段落分けが大体できている。段落内の重点先行や、段落間の関係を示す「関係指示文」の挿入など、分かりやすい文章を書こうとする努力が見られる。しかし、段落ごとのまとまりや、段落同士の関係が部分的に不適切なものもある。文章全体を通しての推敲が足りないように思われる。
- ・文法、語彙、表現などに多少の誤りはあるが、文章の理解に支障はない。ただし、漢字や語句の間違いが目立つものもある。
- ・資料を利用し、必要な場合は引用も行っている。ほとんどのレポートが複数の参考文献を挙げている。

——以上全体的に、明確な問題意識をもって課題に取り組み、これまで学習した内容を生かし、構成のしっかりしたレポートを書いているといえる。

#### 【Bグループ（7人）】

次にBグループのレポートについて見てみる。レポート例⑥のアウトライ

ンは、筆者らがレポートの内容から取り出したものである。

レポート例⑥「札幌大学食堂の良い点と悪い点」

・レポートの目的	主題提示
・大学会館食堂の特徴	特徴の説明
・第一食堂の特徴，大学会館食堂との比較	比較
・北海道女子大学の食堂の特徴，上記の食堂との比較	
・札幌大学の食堂の問題点，改善への提言	問題点，提言
・まとめ	

以下にBグループのレポートの特徴と問題点を挙げる。

- ・ Aグループと同じように、主題の選択や文章の内容に学生自身の問題意識が感じられる。しかし、Aグループと比べ、より身近な問題を主題として取り上げ考察している点に特徴がある。
- ・ 序論・本論・結論の構成が大体できているが、章立てを行っている者は7人中2人、また、序論部分でレポートの目的を明示している者は3人だけである。また最初に掲げた目的と本論の内容が合わなくなってしまうものもある。これは、文章全体を見渡したうえでの推敲が不十分なためであろう。
- ・ Aグループと同じように、「定義」「比較」「説明」「論拠と主張」など、これまで学習したことを使って論理的に考察するように努めていることがうかがえる。ただし、冗漫な部分や論理に飛躍がある部分があり、全体的なまとまりに欠けるものが多い。
- ・ 段落分けが行われているが、段落の分けかたが不適切な部分もある。また、段落間の関係が十分整理されておらず、関係指示文もないために、読み手から見ると構成がわかりにくいものがある。
- ・ 文法、語彙、表現上の誤りが多いものがある。点検が不十分なまま提出し



ているものもあるようである。

- ・資料を示す、文献にあたるなど、主張に裏付けをもたせる努力をしているが、資料の扱いや引用の方法について、まだ不十分なところがある。中には、筆者自身が行ったアンケート調査を資料にしたレポートがあるが、文章の展開とは無関係なデータが頁の多くの部分を占めているなど、データの扱い方に未熟な面が見られる。

— 以上のように、不十分な点はあるものの、主題に対する問題意識が明確で、目的をもってレポート作成に臨んでいる。大学食堂の比較をしたレポートでは、自分の身近なところから主題を見つけ、実例を具体的に示しながら検討を行っている。しかし上に挙げたように、全体としてAグループに比べ、構成や論理展開などに不十分な点がある。

### 【Cグループ（8人）】

Cグループの特徴と問題点は以下の通りである。

- ・自分が選んだ主題について問題意識は持っているようだが、説明や論述の重要な部分が他の文献からの引用で埋められており、本人自身の考察が示されていない。序の部分だけは自分で書いているが、他の部分は引用の羅列が多く、それを自分の言葉でまとめることもできていない。
- ・内容が広がり過ぎて、タイトルと内容が合わない、レポートの目的が不明確、他の文献からの借用部分と自分が書いた部分との間に飛躍がある、などの問題点がある。
- ・特に以下のように、引用に関わる問題が大きい。
  - ①資料を引用した目的が不明確なものがある。
  - ②引用のルールは守っているが、引用部分が多すぎる。直接引用がレポート全体の3分の2くらいを占めるものもある。
  - ③剽窃にあたるものも多い。引用部分と自分の意見との区別が示されていない。

④引用部分の出典が記載されていないものがある。

——先のBグループの場合は、自分の考えや意見があって、それを補強するために引用したということがうかがえるが、Cグループの場合は、他の文献の論の展開をそのまま借用しているものが多い。自分で考えを組み立て、文章を構成するという過程が見られない。

#### 【Dグループ (10人)】

このグループのレポートは、初めから終わりまで、他の文献をそのまま写したものであった。残念ながらレポート全体の約4分の1がこのグループに入る。この問題については第5章で詳しく検討する。

#### 【Eグループ (4人)】

このグループのレポートは、どれも自分の体験や心情を主観的に綴ったもので、今回の課題の目的にはそぐわないものであった。また、一つを除いては文章全体の主題が定まっておらず、思い付くままに書いた文章という印象を受ける。

これらが「レポート」として提出された原因としては、課題の目的を十分理解できていない、自分の文章スタイルへのこだわりが強く小説風の書き方から抜け出られない、感想文型の作文から客観的・論理的な「レポート」への切り替えができていない、などが挙げられる。

### 4.3 最終レポートに見る1年間の学習の成果

前節で見てきたように、A、Bグループの15人、全体の約4割が、程度の違いはあれ、学習したことを生かしてレポート作成に取り組んでいることがわかった。その一方で提出者の半数近くが、他の書物からの借用に頼って書いたという状況も明らかになった。後者の問題については、指導の反省も含めて次章で検討することにして、本節では、筆者らの行ったアカデミック・ライティングの指導が、今回の最終レポートにどのように反映されているのか、3.1.1で挙げた5つの指導内容に則して整理しておきたい。なおここでは、A、Bの計15人のレポートについてその到達状況を見ていくことにする。

### ①アカデミック・ライティングに必要な基礎的知識, 技術

文体, 句読点・記号の使い方, 事実を客観的に述べる文の書き方, 引用の方法, 参考文献の記載などについてはA, Bグループの8割のレポートで適切に行われていた。

### ②考えをまとめていく過程

前節でのAグループの例のように, 自分自身で主題を絞り込み, アウトラインを組み立て, それに沿って文章を書くことができた学生もいた。しかし次章で述べるように, 主題を絞れずに書いてしまった学生も多かった。

### ③論理的な思考の方法

A, Bのグループのレポートにおいては, 定義, 比較, 問題点の整理などを行い, 論理的に述べようとするレポートが多かった。特に主題に関わる重要語について語義の説明や定義を行った上で論じるということが, A, Bグループの6割のレポートで行われていた。また, 文献や資料からの引用, 具体的な事実の列挙などにより, 根拠のある論述を行おうとする姿勢も共通して見られた。

### ④文章構造の意識化

文章構成にもこれまでの学習内容が活かされていた。Aグループの全て, Bグループの一つのレポートで章立てが行われていた。また, 章立てがされていないものでも, 内容的には序論・本論・結論部分から成っており, 論の展開や文章構成への意識化がうかがえた。

また, 重点先行の書き方も浸透したと考えられる。A, Bグループの8割で序論部分にそのレポートの目的や展開が述べられており, さらにいくつかのレポートでは, 段落内の中心文を段落の先頭に置くこと, 段落相互の関係を示す関係指示文を効果的に配置するなどが行われていた。

### ⑤文章に対する評価・推敲能力の養成

文法・語彙・表記などの正確さという点では, 全体的にまだ不十分である。A, Bのすべてのレポートにおいて, 書いた後の見直しが足りないようであ

る。レポート作成にあたっては、文法・語彙・表記に関して日本語母語話者に点検してもらうということも指導してよいのではないだろうか。

以上のように、不十分ではあるが、アカデミック・ライティングの習得という点で一定の成果が見られた。しかし一方で、他からの借用に頼ったレポートが多かったという問題もある。この点については、次章で問題点を検討し、今後の課題を明らかにしていきたい。

## 5 問題点の考察

### 5.1 A, Bグループ以外のレポートの問題点

前章の2節で述べたように、筆者らの評価の結果から、全体が五つのグループに分かれた。この分類結果を概観すれば、筆者らが課した最終レポートの目的に合致し、かつ、一般に大学で求められる「レポート」としての資格を備えるものは、A, Bグループに属するもののみで、全体の40%でしかない。ここでは、このような結果をもたらしたものは何か、問題点を探ってみたい。

今回の評価の結果から、A, B以外のグループに属する文章には次のことが言える。

- ①レポートの主題が見えない。つまり、何のためにその文章が書かれているのか不明である。
- ②文章の大部分が他人の文章の引用もしくは無断借用で、自分の言葉で書いた部分が極端に少ないか、あるいは皆無の状態である。
- ③自分の考えで論理の組み立てや文章の構成を行っていない。

では、これらの問題点は筆者らが行ってきた指導とどのように関わっているだろうか。

## 5.2 問題点と指導との関わり

上記の①については、学生の問題意識が大きく関わるであろう。レポートの作成は、まず自分の問題意識から始まり、レポートのテーマを定め、更に主題を探るという過程を辿るからである。

筆者らは今回の指導に際して、問題意識の喚起も視野に入れテキストの読み物部分を設けた。さらに、授業では、読み物で取り上げた問題について最新の情報を加えるだけでなく、その時々ニュースに登場する話題も取り入れ、それらと自分たちの現在、または未来の生活との関わりを考えさせるように努めてきた。

しかし、選んだテーマからさらに主題を絞り込むということについては、指導は十分かつ適切とは言えなかったのではないか。その理由の一つは、テキストの各課の作文課題の殆どが、与えられたテーマのもとで既に絞り込まれた主題について書くことだったことである。もう一つは、最終レポートに至って主題の絞り込みの意味や方法の説明を行い、実例を示したものの、学生に実際に大きなテーマから主題を絞り込ませ、それを書かせてみる練習はさせなかったことである。これは、過保護に育てた子供に、ある日急に自立せよと迫るのに似た行為だったかもしれない。

②の問題は、外国人留学生に限らず、日本人の学生にも起こり得ることであろう。自分自身の考えにも言葉にも自信がもてない、今までにそのような「写し」のレポートを出して認められてきた、などがその理由と考えられよう。もちろん、文章を書くことに真面目に取り組む気がない、という理由もあろうが、それは論外である。

引用について指導してきたことは、「文章の目的に沿って、明確な意図のもとに行う引用は大いに行ってよい。しかし、そのためには引用の規則に従ってそれを明記しなければならず、無断引用は許されない」ということであった。これは間違っていないが、一方では、「明確な目的があれば、自分の言葉を使わずに、他人の文を繋ぎ合わせて文章を作ってもいい」と解釈された

かもしれない。特に外国語の学習者は、ネイティブの書いた文章を見ると、自分のそれが稚拙に見え、書くことに怖じけてしまうことがある。このような時に上のような解釈をすれば、引用の濫用に陥りかねない。

しかし、当然のことながら、他人の文章を借りていては自分で書く力はつかない。このことを普段の授業で強調し、稚拙さを恐れず自分の言葉で書くことを励ます必要があったのではないか。

また、「写し」の問題は、次のような事実が誤解を招いたかもしれない。授業では、課題作文のために資料を予め与えることがあったが、それらは一般的な事実を伝える資料であったため、資料からの同語、同表現の使用を認めていたことである。資料の利用の心得として、一般的な事実を伝える表現は共通に使えても、個人の意見や、個人による工夫された表現は無断借用できないことを教えておく必要があったと言えよう。

③の問題の出発点は段落の指導に始まる。筆者らは、中心文を始めに置き、支持文を続け、まとめで終わるという一段落の文章の構成の書き方が掴めたら、大きい文章の構成も同じように書けるようになると想定し、『レポートの文章』では第1部の終りで指導した。

だが、この指導でも実例の提示や説明に終始し、実際に書く練習が欠けていたことと、課題作文で自分で段落内容の組み立てをする機会が少なかったことが相俟って、文章を構成する力が十分につかなかったものと思われる。

以上述べてきた問題点は、学生の日本語能力とは必ずしも関係がない。A、Bグループの中には入学時のクラス分けで最下位のクラスの者も入っている。かれらは、課題作文や、最終レポート指導での教師のフィードバックに着実に応え、指導のポイントを掴み、単純な表現ではあるが、自分の考えをまとめ、自分の言葉で述べているのである。

学生が自分が書いた作文への教師のフィードバックをいかに処理するかを調査したCohen (1987)によれば、自分自身の学習能力を低いと評価している学生は、高く自己評価している学生に比べ、返却された作文への関心が薄

く、教師の添削やコメントを注意深く読まないという。3.2.2で述べたように、テーマや主題の提出物にコメントをつけ、再提出を要求しても反応がなかった学生の中にはこのような事例に当てはまる者もあろう。

しかし、このような学習に消極的な学生に力をつける指導こそが教師に求められていると言える。それにはどのような指導を行っていけばよいのか。次章で今後の課題を考えたい。

## 6. 今後の課題

前章の考察から、アカデミック・ライティング指導の今後の課題として次の4点が挙げられる。

### ①学習の中で学生自身が文章を書く機会をさらに多くする

筆者らが今回改めて実感したことは、モデルとなる文章を提示することだけでは、実際に書く力を伸ばすことは難しいということである。一部の能力のある学生は、学んだことを吸収してそれなりに書けるようになるが、これまで日本語で文章を書く経験の乏しい学生の場合、目的意識を持って書く、しかも自分自身で考えをまとめ文章を構成する、ということを経験する必要がある。教科書の各課での、目的を絞った短い作文課題を増やすようにしたい。

### ②最終レポート課題は、それまでの学習のまとめに相応しいものとする

それまで体験していないことは、最終レポートで要求しない。つまり、最終レポートの前までの学習によって、より多くの学生が今回のAグループのようなまとまりのあるレポートが書けるようにする。具体的には、教科書の後半部の「論述」の課の中で、主題の明確化、アウトラインの作成、章の立て方、根拠を伴う意見の書き方、引用の範囲や方法などの指導を行い、そのすべての過程を実際の文章作成を通して経験させ、その上で章立てのある最終レポートを書かせるようにする。

### ③ 学生自身の問題意識を喚起し、学生自身が自ら考えるという態度を養う

前章でも述べたように、アカデミック・ライティングにおいては、学生自身の主体的な姿勢が極めて重要である。広い視野や様々な事柄に対する問題意識に加え、自分で立てた主題について、自分で検討し、資料を集め、考えをまとめていくという問題解決的な学習の仕方が求められる。筆者らが直接留学生に聞いた範囲では、母国でそのような学習方法を経験した者はごく僅かであった。大学でのアカデミック・ライティング指導においては、単に文章表現力を養うにとどまらず、上で述べたような主体的な学習方法を実際の体験を通して、習得させるようにしたい。

また、資料の収集に関しては、留学生の場合は日本人学生に比べ、日本語の資料の入手やその内容の理解にハンディがある。文章表現に限らず、読解、聴解、口頭表現などの他の科目においても、教材を工夫し、社会の幅広い問題に関しての情報を提供するとともに、資料の所在や収集の方法を知らせるようにしたい。また、取り上げられた問題について学生が自由に意見を述べられるような雰囲気も大切にしたい。こうした日頃の学習によって、学生の視野を広げ、主体的な学習態度を養っていくようにしたい。

### ④ 引用や借用に頼らずに自分の言葉で書くように励ます

前章で述べたように、学生の中には日本語で書こうとすると稚拙な文章に感じられ、他の書物で理路整然と書かれたものを借用する誘惑にかられる者もいる。稚拙さを恐れずに、自分が習得した日本語を駆使して書こうとすることが大切で、教師もそれを励ますようにしたい。引用の本来の目的は、自分の考えを補強するためのものであることを教えたい。

1年間の指導を振り返った結果、これまで述べてきたように、いくつかの成果ともにそれを上回る課題も明らかになった。学年末の学生へのアンケート調査(資料4)では、教科書全体については34名の回答者中「大変役に立った」と答えた者が7割、「役に立った」が3割で概ね好評であった。しかし、



難易度, 作文課題の量・回数などについては評価にバラツキがあり, 更に検討の必要があることがわかった。こうした結果も考慮に入れながら, 筆者らはすでに今年度の指導を始めている。教科書も昨年度のものに比べ, 大幅な改善を加えている。今後とも実践と検討を繰り返しながら, 留学生のためのアカデミック・ライティング指導の内容と教材について考えていきたい。

#### 参考文献

Cohen, Andrew D. (1987) 'Student Processing of Feedback on Their Compositions' in *Learner Strategies in Language Learning* edited by Anita Wenden & Joan Rubin, London : Prentice Hall international.

二通信子/佐藤不二子 (1999 a) 「留学生のためのアカデミック・ライティング教材の開発に関する研究」『北海学園大学学園論集』第 99 号

二通信子/佐藤不二子 (1999 b) 『留学生のためのレポートの文章』アカデミック・ライティング研究会

## [資料 1] 第2部第1課 評価票

課の目標	①仕組みが分かりやすく書かれているか ②説明の順序が適切か (全体から部分へ) ③「である体」で書かれているか	<評価>
その他 (各学生へのコメント, 注意など)		
・		
・		

## [資料 2] 第I部の学習のまとめ

点 検 項 目	課
①「である体」で統一しているか。	1
②自動詞と他動詞の混同はないか。助詞を正しく使っているか。	2-1
③「は」と「が」を正しく使っているか。	2-2
④主語と述語は正しく対応しているか。	2-3
⑤必要な名詞化をしているか。	2-4
⑥句読点, 記号は正しく使用しているか。	3-4
⑦引用の規則を守っているか。	5
⑧段落について以下のことはどうか。 段落内の構造 (一つの話題, 重点先行, 論理的なつながり) 段落相互の論理的なつながり	6
⑨その他, 自分の間違いやすい点 ・ ・	

## [資料 3] 最終レポートの評価票

評価項目	* ( ) は該当の課	評価
①序論, 本論, 結論の各部分に分け, それぞれの部分に題をつけているか (第II部第10課)		
②序論に主題(何についてこのレポートに書くのか)を明確に書いているか (第II部第10課)		
③段落を適切に分けているか (第I部第6課)		
④意見, 主張には根拠が示されているか (第II部第9課)		
⑤反対の立場からの主張も考慮しているか。それに対する反論もしているか (第II部第9課)		
⑥定義, 比較因果関係を示すなど, 論理的な手法を使って書いているか (第II部各課)		
⑦他人の言葉や文章の引用, またはそれらを要約したものについて, 出典をはっきり示しているか (第I部第5課)		
⑧推敲(漢字・語句・文法などの見直し, 訂正)を十分に行なっているか (第I部各課)		
<その他>		

## [資料 4] 『レポートの文章』及び授業についてのアンケート結果

\* ( ) 内の数字は回答数を示す。アンケートに応じた学生数…34 名

## I. テキスト『留学生のためのレポートの文章』について

## 1. テキストの学習項目

1.1 このテキストの学習項目はあなたにとって役に立ちましたか。

- a. かなり役に立った……………(24)                      b. 少し役に立った……………(9)  
c. あまり役に立たなかった…(0)                      d. わからない……………(1)

1.2 第 1 部で役に立った課, 項目に○をつけてください。

第 1 課 レポートに使われる文体……………(23)

第 2 課 文の基本

1. 自動詞・他動詞などの動詞の使い分け……………(14)  
2. 助詞の「は」と「が」の使い分け……………(18)  
3. 文のねじれ ……………(17)  
4. 語や文の名詞化……………(17)

第 3 課 句読点の打ち方……………(15)

第 4 課 各種の記号の使い方……………(17)

第 5 課 引用の仕方……………(24)

第 6 課 段落の書き方……………(25)

1.3 第 2 部で役に立った課に○をつけてください。

第 1 課 説明(1) 仕組み・状態……………(18)

第 2 課 説明(2) 歴史的な経過……………(12)

第 3 課 分類……………(16)

第 4 課 定義……………(19)

第 5 課 要約……………(20)

第 6 課 比較・対照……………(24)

第7課	因果関係	(29)
第8課	図表の利用	(12)
第9課	論述	(21)
第10課	レポートの作成	(26)

## 2. テキストの読み物

2.1 本文の中で興味をもったものに○を、興味をもてなかったものに×をつけてください。

第1課	日本の国会	○(15) × (2)
	ボランティア切符制度	○(23)
第2課	アセアン	○(9) × (3)
第3課	和語・漢語・外来語・混種語	○(27)
第4課	お金を使うチンパンジー	○(19) × (2)
	バリアフリー	○(8) × (2)
第5課	文化とコミュニケーション	○(14) × (1)
	野生動物 ペットにしないで	○(22) × (1)
第6課	百貨店と量販店	○(17) × (2)
	税金にゴムひもがついている	○(13) × (1)
第7課	紫外線と皮膚ガン	○(30) × (1)
	フロンガスと地球の破壊	○(29) × (1)
第8課	末期治療に対する考え方	○(17) × (2)
	食糧の生産・供給についての国民の意識	○(15) × (1)
第9課	遺伝子組み換え食品の表示の必要性	○(27) × (1)
第10課	レポートの実例「店舗形態と価格の比較」	○(16) × (2)

2.2 他に読み物として取り上げてほしかったものがありますか。

・教育システムについて取り上げてほしかった。

2.3 読み物の長さはどうでしたか。

- a. 全体に長すぎる…(0)    b. 適当…(26)    c. もっと長くてもよい…(7)

2.4 内容の難易度はどうでしたか。

- a. 難しかった…(8)    b. 普通…(24)    c. やさしかった…(2)

2.5 語句・表現の説明はどうでしたか。

- a. 説明不足…(9)    b. 説明は十分…(23)    c. どちらともいえない…(2)

### 3. 理解問題

3.1 理解問題に興味がもてましたか。

- a. もてた…(21)    b. もてなかった…(5)    c. どちらともいえない…(6)  
d. その他 ・興味はもてたが難しい。・理解問題は選択形式がいい

### 4. 文型の表

4.1 各課の文型の表はどうでしたか。

- a. わかりやすい…(18)    b. わかりにくい…(4)    c. どちらともいえない…(5)  
d. その他 ・先生が説明しないとわからない。・時々わからない

### 5. 作文課題

5.1 回数はどうでしたか。

- a. 多かった…(13)    b. 少なかった…(5)    c. 適当だった…(17)

5.2 1回に書く分量はどうでしたか。

- a. 多かった…(1)    b. 少なかった…(3)    c. 適当だった…(29)

5.3 課題作文を書くときの資料はどうでしたか。

- a. 十分だった…(13)    b. 少なかった…(10)    c. 自分で探したほうがいい…(13)

### 6. このテキストについての意見があれば書いてください。

- ・書く量を減らして欲しい。・あまり面白くない。・内容が難しい。
- ・英語の綴りに誤りがあった。・印刷状態が悪い。・活字を鮮明に。

・いいテキストだ。・内容がわかりやすい。・実用の文章があるから、よかった。

## II. 教師の教え方はどうでしたか。

### 1. 説明はどうでしたか。

a. よくわかった(20)      b. 大体わかった(15)      c. わかりにくかった(0)

### 2. 課題作文についての指導はどうでしたか。

a. よくわかった(20)      b. 大体わかった(15)      c. わかりにくかった(0)

### 3. 授業の進め方について意見があれば書いてください。

- ・テキストの漢字の読みがなをたくさん書いてほしい。
- ・ちょっと余裕を与えながら授業をしてほしい。
- ・できれば授業内で課題作文を終えたい。
- ・同じ話題を違う項目（読解・口頭表現）の授業で何度も取り上げないでほしい。
- ・発言しやすい雰囲気だった。
- ・毎回の授業が充実していてとてもいい勉強になった。